

聖書：コリント人への手紙第二 6：14～7：4

説教題：神を恐れつつ聖さを全うする

日時：2024年12月29日（朝拝）

この手紙が宛てられたコリント教会とパウロとの間には難しい関係がありました。パウロがコリントで伝道した後、その地に自称大使徒たち、実際には偽教師たちが入って来て、コリント教会のある人々は大きく影響を受けました。そして偽教師たちと一緒にあってパウロを批判し、彼は使徒ではないと見なすようになりました。そんなコリント教会に対してパウロが福音のために、また彼らの祝福のために、自らが使徒であることを弁明するために書いたのがこのコリント人への手紙第二です。パウロは真の使徒とはどのような者なのか、自らの身を切ってみせるかのようにして率直に話して来ました。そして直前の 11～13 節で、私たちの心は広く開かれているから、あなたがたも心を広くしてくださいとアピールしました。しかしコリント教会との関係回復実現のためには一つの課題がありました。それはコリント人たちの生活でした。今日の箇所が述べていることは、彼らの生活の中には悔い改めなければならないことがあるということです。この悔い改めがなされなければパウロとの真の関係回復はありません。その課題とは何でしょうか。それは 14 節冒頭にある通り、「不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません」ということです。つまり彼らは不信者とつりあわないくびきをともにしていたということです。この「くびきをともにする」という言葉の背景となっているみことばが申命記 22 章 10 節にこうあります。「牛とろばとを組にして耕してはならない。」 種類の異なる動物を組にして、その首に横木をかけて働かそうと思ってもうまく行かない。組み合わせが釣り合っていないため、力を合わせるどころか、かえってお互いの足を引っ張り、お互いの力を削ぎ合って、どうにも前に進めない恐ろしい状態になってしまいます。しかしこのパウロの言葉は不信者と一切交わってはならないという教えではありません。パウロはコリント人への手紙第一 5 章 10 節で、もしそうだとしたら、クリスチャンはこの世から出て行かなければならないでしょうと言いました。ですから日常的な関わりは問題ないのです。しかしくびきの関係はダメだと言っているのです。つまり密接な関係です。その人に引っ張られてしまう関係です。信者としての自分の生活が妨げられる関係です。相手とバランスを取ろうとして結局神のことが後回しになる関係です。つまり神よりも人を大事にしてしまう関係です。神に従う歩みが後退してしまうような関係を持つことです。

パウロは続いて5つの問いをもって不信者とくびきをともにすることは成り立たないことを示します。まず一つ目は「正義と不法に何の関わりがあるでしょう。」 正義とは神が良しとする義の基準のことで、一方の不法は読んで字のごとく神の法の否定です。片方は神の義を重んじ、喜んでこれに従おうとしますが、もう片方はこれを無視し、否定します。このような組み合わせでどうやって信者が妥協せずにも歩めるでしょうか。二つ目は「光と闇に何の交わりがあるでしょう。」 コロサイ人への手紙1章13節に「御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました」とあります。クリスチャンは暗闇から光へと移された者たちです。その世界は以前と変わりました。光と闇は同居していません。その双方の側にいる人たちが、どうやってくびきをともにして歩むことが可能でしょうか。三つ目は「キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。」 ベリアルとはここではサタンのことです。私たちはかつてはサタンの支配下にあったと聖書は語ります。片やキリストを主とし、キリストに従おうとする人、片やキリストを認めず、そこから離れるようにと働きかける力の下にある人。この両者がどうやって調和して歩むことができるでしょう。四つ目は「信者と不信者が何を共有しているでしょう。」 さすがにこれは言い過ぎではないか。共有しているものもあるのではないかと言う人もいるかもしれませんが、これは前後関係から理解すべきです。これはこれまで見て来たことの言い換えに過ぎません。信者とはキリスト者のことであり、キリストを第一とする人です。不信者はそうでない人です。その根本から異なっている人がくびきをともにすることは無謀なことです。そして五つ目に「神の宮と偶像に何の一致があるでしょう」とあります。ここに来て何が問題だったのかが少し見えて来ます。ここに「偶像」と出て来ているということは「偶像」の問題と関係があったのではないかということです。そしてこの偶像の問題は、先のコリント人への手紙第一でも述べられていました。その課題が未解決のまま継続していたと考えられます。

コリントはギリシャの大都市であり、異教社会でした。そのような異邦人世界における社会生活・市民生活は異教の神々との関わりなしには考えられませんでした。多くの会合は異教の神殿や偶像の神々が祭られた場所で行われ、その神々への礼拝が会合の一部として組み込まれていました。また地域の行事や同業者の組合の宴会はそういう場所で行われ、異教の神々に献げられた肉が振る舞われました。こういう中でクリスチャンはどう振る舞うべきか、パウロが何と言ったかを皆さんは覚えていらっし

やるでしょうか。ある人は、神はただお一人であって偶像というものは実際に存在しないのだから、偶像の宮で偶像に献げた肉を食べても何の問題もない。存在していないものを恐れる必要はない。これが正しい知識を持つ信者のあり方だと誇っていました。しかしパウロはそうでない！と言いました。確かに偶像の神は存在しないが、人々にそれらを拝ませている力が背後に存在する。それがサタンである。だから偶像の宮へ行って偶像礼拝をともしたり、その宗教的食事にあずかることはサタンと交わることであると言いました。その生活を続けている人たちがなおコリント教会にいたのかもしれませんが。

また偶像礼拝と関連して淫らな行いの問題もありました。ある人たちはクリスチャンは今や何をしていても自由であるとか、あるいは魂の救いを強調するあまり、肉体は汚れていても仕方ないとして、以前の習慣のまま、遊女と交わることを肯定していました。さらにある人は父の妻（おそらく継母）を自分の妻にしていました。こういった偶像礼拝と関係する不道德な歩みがなお解決されていない課題として残っていたと考えられます。ですからパウロはこの第二の手紙の 12 章 21 節でこう言います。「私が再びそちらに行くとき、私の神があなたがたの前で、私を恥じ入らせるのではないのでしょうか。そして、以前に罪を犯していながら、犯した汚れと淫らな行いと好色を悔い改めない多くの人たちのことを、私は嘆くことにならないのでしょうか。」このような異教との関わりにおいて悔い改めることなしでパウロと和解することはできないということでしょう。パウロを受け入れるとはパウロの福音を受け入れることであり、その福音が求める要求を受け入れることです。そうしてこそパウロとの正しい関係、さらにはパウロを遣わした神との正しい関係にコリント人たちは立つことができるのです。

パウロはそのためにクリスチャンが持つべき自己理解について 16 節後半から語ります。それは「私たちは生ける神の宮なのです」ということです。信者の集まりである教会が神の宮であることは、I コリント 3 章 16 節で次のように言われていました。「あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。」 神殿とは神が住まわれるところです。神はそのように信者たちの内に、教会の内に臨在しておられます。私たちは生ける神の宮なのです。このことを私たちはまず深く受け止めるべきです。そしてパウロは「神がこう言われるとおりです」と述べて旧約聖書をいくつか引用し、三つのことを述べます。まず一つ目は

神が私たちの間に住んでおられるということです。16 節で引用されているみことばはレビ記 26 章 12 節です。レビ記の方の言葉を読みます。「わたしはあなたがたの間を歩み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。」そして次のレビ記 26 章 13 節にはこうあります。「わたしはあなたがたの神、主である。わたしはあなたがたを奴隷の身分から救い出すために、エジプトの地から導き出した。わたしは、あなたがたのくびきの横木を砕き、あなたがたが自立して歩めるようにした。」神はエジプトのくびきから解き放って、イスラエルが神の民として歩めるように導いてくださいました。その祝福に導き入れられている私たちなのに、この特権を投げ捨て、再び神に従うのではない人々とくびきをともにする関係に自ら入って行くべきでしょうか。二つ目に 17 節で「それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らから離れよ。」これはイザヤ書 52 章 11 節からの引用です。イザヤ書の文脈では、これはバビロンへ引いて行かれたユダヤ人に対して、その異教的な捕囚の地を後にしてユダとエルサレムに帰還するように！と訴えるものです。そのように異教の神々を拝む人々から離れ、そこから出て来るように！とされています。そして三つ目に、そうすれば「わたしは、あなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる」と言われます。つまり神との親しい交わり、神の息子たち・娘たちとされる歩みが導かれます。これは私たちが偶像との関わりを捨てることによって、この祝福を勝ち取るという意味ではありません。神はただ恵みによって私たちに祝福へ導いてくださるのですが、そのためには私たちの方で捨てなければならないものがあるということです。異教から離れなければならないということです。そちらに足を半分突っ込んだ状態で神の子どもとしての特権を享受することはできないということです。

こうして 7 章 1 節のまとめのことばとなります。「愛する者たち。このような約束を与えられているのですから、肉と霊の一切の汚れから自分をきよめ、神を恐れつつ聖さを全うしようではありませんか。」 「このような約束」とは今見た 6 章 16～18 節の約束のことです。「肉と霊の一切の汚れから自分をきよめ」とあるのは、肉と霊のどちらも大切であるということです。肉体はどうせ救われないと見下して淫らな行いに身を委ねてはいけませんし、また偶像の宮での食事を軽く考えてサタンと霊的に交わる者であってもいけない。これらから自分をきよめて、つまり離れて、「神を恐れつつ聖さを全うしようではありませんか」と語られます。私たちの前に置かれているのは「聖さを全うする」という歩みです。そういう課題があるのですから、つり合わな

いくびきをともし、その反対方向へ引っ張られることを良しとしている場合ではないのです。私たちが聖化のゴールへ導こうとして養い育ててくださっている神を畏れ敬い、感謝し、一切の汚れから自分を分離して、益々神に倣って聖なる者とされることを求めて前進しよう！とされているのです。

そして再度、7章2～4節で「私たちに対して心を開いてください」と語られます。2節に「私たちはだれにも不正をしたことがなく、だれも滅ぼしたことがなく、だれからもだまし取ったことはありません」とありますが、これはパウロがそのように非難されていたということでしょう。コリント人たちのため、彼らからの支援を一切受けなかったパウロなのに、こういうひどい言葉で中傷されていました。彼は3節でコリント人たちは私たちの心のうちにあると言います。「私たちとともに死に、ともに生きるために」とは生死を分かち合う友情に生きているという意味です。生においてばかりでなく死においてもあなたがたとの友情は切れないと。しかし良く注目すると生死の順番が逆です。先に「死」が来て、後に「生」が来ています。これはクリスチャンの世界観を示しています。クリスチャンは死で終わらない希望に生きています。キリストに従ってまず死へと進みますが、その後で命が続きます。このことにおいて深く結ばれている者たちだと言っています。そして最後の4節で、「私には、あなたがたに対する大きな確信があり、あなたがたについて大きな誇りがあります。私は慰めに満たされ、どんな苦難にあっても喜びに満ちあふれています」と言います。パウロは彼らを導いている主への信頼によって確信を持ち、誇りを抱いています。また慰めと喜びにあふれているのは、次の箇所でも述べられる内容と関係します。先に書き送った厳しい内容の手紙がコリント人たちに受け止められたことを知ったからです。それゆえに慰められ、喜びを覚えている者として、パウロはこの後のことも書いて行くのです。

私たちは今日の箇所から何を自分へのメッセージとして受け取るべきでしょうか。私たちは今日の箇所でも述べられていたように、生ける神の宮であり、神の民であり、また神の息子たち・娘たちとされている者たちです。そのような私たちが何かつり合わないいくびきをともししていることはないでしょうか。くびきで思い出されるのは、私たちは今やイエス・キリストと同じくくびきでつながれていることです。イエス様はマタイの福音書11章28～30節でこう言われました。「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わた

しは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやしく、わたしの荷は軽いからです。」 私たちは今や主とくびきをともにし、主と歩調を合わせて歩む者たちとされています。そのような私たちがこれとは合わないくびき、この歩みをいくらかでも妨げるくびきを自分にかけるべきでないことは当然のことです。もしコリント人たちがここで言われている生活を続けるなら、どうなるでしょう。それはパウロとパウロが語る福音を受け入れないことを意味しますし、またパウロを通して語っている神とまっすぐには向き合わないことを意味します。そうする人は神の祝福から外れて行くことになります。ですからそうならないように、正しい歩みに立ち返るように！とパウロは語っています。

今日は 2024 年最後の礼拝の日です。一年のここまでの主の導きと守りを感謝したいと思います。そしてこの一年の歩みを振り返って、そこに神との歩みを妨げるものが何かあったのでしょうか。つりあわなくくびきをともにしたことがあったのでしょうか。もしあるなら、それを脇に置きたいと思います。私たちはただ恵みによって救いをいただきました。暗闇から光へ、サタンの支配から御子のご支配へと移されました。そして神が住まわれる神の宮の一部とされました。しかし私たちはまだ聖化のゴールに達していません。私たちにはまだまだ踏み進むべき先があります。聖なる神は私たちが聖なる神に益々似た者となるように、聖なる神につき合う者となるように導いてくださっています。そして必ずゴールまで導いてくださいます。ですから私たちも自らをきよめるように！と言われていています。私たちはこの神を見上げて感謝し、恐れをもって聖さを全うする歩みへ進む者とされたいと思います。神とともに歩むことを一番大事なこととして求めて、これを妨げ、その反対方向へと引っ張るくびきを自らの首にかけることがないように。今一度自らの生活を点検し、悔い改めるべきことがあるなら悔い改め、新しい年もなお一層、神を恐れつつ聖さを全うする歩みへと進む者たちへ導かれて行きたいと思います。